
ストライクウィッチーズ ～太陽の男と少女達～

アラタビト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 〈太陽の男と少女達〉

【Nコード】

N9873R

【作者名】

アラタビト

【あらすじ】

魔力が存在する世界の20世紀初頭、突如出現した異形の敵「ネウロイ」の圧倒的な戦力と瘴気の汚染による大陸侵略が進んでいた。人類は唯一の希望として、魔導エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を唯一駆ることの出来る魔力を持つ少女「魔女」による「ストライクウィッチーズ機械化航空歩兵」に望みを託した・・・そんなある時、一人の青年がウィッチ達の前に現れた。黄金に輝く右腕を振るい、ネウロイを撃墜する男の名は――――

プロローグ『太陽の男』

それは、物語が始まる少し前の話・・・

燃え盛る大地。建造物は崩壊し、人々の悲鳴が木霊する様は正に地獄絵図と化していた

空は黒煙により混沌し、さらにそこには人々の平和を脅かす未知の生命体『ネウロイ』が支配していた

宿敵『ネウロイ』を打倒するべく、魔法の力で自由自在に空を翔る少女達

通称『ウィッチ』が縦横無尽に駆け巡り、ネウロイとの激しい戦いに着手している中

一人の少女『ゲルトルート・バルクホルン』とその妹である『クリスティアーネ・バルクホルン』は不思議な出会いを果たす

少女『ゲルトルート・バルクホルン』は故郷であるこの国をネウロイから救うべく、仲間と共に自身を戦場へと駆り立てた
激戦は長々と続くが、たとえ戦闘力の高いウィッチといえど、ネウロイの圧倒的な戦力に歯が立たなかった

そんなある時。ゲルトルートに不幸が舞い降りる

なんと撃墜したネウロイの破片が、偶然迷い込んでしまった最愛の妹であるクリスティアーネへと降り注がれたのだ

「クリスウーーーー！！」

ゲルトルートは叫ぶ。必死にその手を妹へ向けて・・・

しかし彼女とネウロイの破片の落下速度では到底間に合わぬ距離

それでも彼女は必死に翔る・・・

そして、ネウロイの破片が墜落する寸前・・・どこからともなく声がゲルトルート頭の頭に響く

——衝撃の・・・！！

そして次の瞬間。暴風が吹き荒れ、クリスティアーネの前に『彼は現れた

「ファースト・ブリットオオ——！！！」

その男は、眩いばかりに輝く黄金の右腕をネウロイの破片へと叩きつけ、その破片を打ち砕いた

ゲルトルートは我が眼を疑った。否、おそらくその場にいた全ての人は忘れることの出来ないだろう瞬間

黄金の腕と赤き羽の男

やかてゲルトルートは我に返り、急いでクリスティーアーネへと駆け寄る

「クリス！」

「おねえちゃん！」

二人は抱き合う。これが現実であると・・・確かめ合うように

ゲルトルートは視線を上げ、その男を見る

無言のまま背を向けた状態で立ち尽くす男。顔ははっきりとは見えないが、微かに覗いた口元は笑みをこぼしていた

「妹さん、大切にしてやんな」

男はそう言い残すと、黄金の右腕を地面へ殴りつけ、その反動で上空へと飛翔し、未だ大地を焼く巨大なネウロイへとその右腕を突き付ける

その瞬間に放たれた七色の光が晴れると、上空にいた殆どのネウロイと男の姿は消えていた

プロローグ『最強の息子』

朝。小鳥の囀りが耳に届くと同時に『俺』は目を覚ました
目に移るのは自室の天井
接点が合わない目を擦りながらベッドから起き上がる

時刻は午前7時
カーテンの隙間から朝日が差し込む

「くあゝゝあ」

大きな欠伸をかきながら階段を下りる

「あ、おはよう恭くん♪」

階段を下りた俺に、そう言って微笑む女性。見た目20代前半に見えるこの女性、実は・・・

「おはよう、母さん」

そう、俺の母親なのだ

見た目とは裏腹に、歴とした18歳一児の実母なのだ
母さんは麦色のブロンドヘアーを赤いリボンで一纏めにした髪型と
エメラルドグリーンの瞳が特徴的でかなり美人

「親父は？」

俺はそう言いながら机の上の新聞を手取る

「カズ・・・お父さんなら『野暮用』だよ」
母さんの言葉に俺は「またか」と溜め息を吐く

俺の父親。21年前にとある事件をきっかけに有名になった人物
端から見れば誇らしいのだが・・・いかんせん、あの人はかなりいい加減な人間なのだ

ここ、俺が生まれた『ロストグラウンド』という所で『シエルブリ
ットのカズマ』という名前を知らない人間は居ないだろう
俺の父親は『最強のアルター能力者』なのだ

息子である俺から見れば、親父は目標であり越えるべき男だ

そして俺もまた親父と同じアルター能力を覚醒させた

俺は親父が一時期世話になったという武装警察機関『HOLD』と
いう所で不正なアルター能力者の障害事件を解決しながら戦っている

親父曰く『あそこは暖かすぎてムズ痒い』らしい

まあ親父やしいっちゃらしいが・・・

HOLDでは、かつて親父と死闘を繰り広げた『劉鳳』さんが隊長
を勤め、俺はその下で働いている

HOLDに所属して2年・・・俺は一段と強くなった
だがまだ足りない

俺はもっと強くなる。親父を越えるために・・・『最強のアルター能力者の息子』として名に恥じないように強くあり続ける

母さんが作った朝食を食べ終え、俺はHOLD隊員の制服に着替える
どうにも、俺は親父の性格に似たらしきこういった正装はあまり好きになれないでいる

「はい、恭くん。お弁当」

母さんから弁当を受け取り、荷物を整える
今日から部隊で大規模な犯罪組織の鎮圧作戦が拮抗されるらしく、3日間の出張になる

「ありがとうございます、じゃ・・・行ってきます」

「行ってらっしゃい♪」

こうして俺『由詔 恭介』の長い戦いが幕を開く・・・

プロローグ『最強の息子』（後書き）

しかし俺は知らなかった・・・この出張を機に、俺の戦いは大きく狂い始める事を・・・

「これより我々はA－21地区に大規模な鎮圧作戦を結構する。皆も知っての通り、A－21地区では悪質な殺傷事件が勃発。本日よりこれを鎮圧する」

武装警察機関『HOLD』本部では部隊長である劉鳳さんによる作戦会議が開かれており、全隊員たちは真剣な表情で聞いている

A－21地区。そこではアルター能力者による障害事件が勃発していた

もちろん、それをウチの隊長が見逃すはずもなく本土側へ緊急通知。そして現時刻をもってアルター能力者を中心とした犯罪組織の撲滅

を結構したのだ

「出発は午前1200。それまで各員は状況の把握、及び部隊編成を確認しろ」

「「「「「はっ!!」」」」」

会議終了後

俺は荷物をトレーラーに積み込み、一息ついていた

「恭介」

すると、劉鳳さんが現れ俺へ声を掛けてきた

「隊長、どうも」

俺は軽く敬礼をする

劉鳳

俺の親父と死闘を繰り広げたアルター能力者。38歳とは思えないほど整った顔立ち、さらに部下からの信頼度が高く、かなり人気の高い人だ

ただし本人曰く『自分は不器用』らしい

「今回の作戦・・・要は恭介。お前だ、期待している」

「もちろん、親父譲りの力で頑張りますよ」

「ああ、よろしく頼む」

そう言い残し、劉鳳さんは去っていった

プロローグ『男の夢』

ついに戦いが始まった

作戦は、アルター能力を持つ隊員を先行突入させ、危険性のあるアルター能力者を無力化。その後一気に組織を撲滅と単純な作戦である

「さあて、始めるか！」

人差し指、中指、薬指、小指、親指を順に拳を握り締めアルターを発動させる

ボン！　ボン！　ボン！　キューーーーーン！

周囲の地面が抉り取られ、原始レベルまで分解される

俺の周囲が七色に発光し、突き付けた右腕に渦巻くように分解した物質が集まりだす

アルター能力とは

正式名称は精神感应性物質変換能力と呼ばれ、自分の意志（精神力）により周辺の生物以外のあらゆる物質を原子レベルで分解し、各々の特殊能力形態に再構成することができる特殊能力なのだ

そして俺の能力『シエルブリット』は親父と同じ『融合装着型』という自分自身の肉体と物質を融合させる

やがて俺の右腕は黄金色のアルターが構成され、背中に三枚の羽が出現する

「衝撃のファースト・ブリット！」

右腕を脇に締め、拳を固く握り締める

3枚の羽の内の1枚が砕け、エメラルドに輝く光が噴射し、俺の体を前へと駆け抜けさせる

「うおらァ————！！！！」

体を回転させ、発生する遠心力のまま突き進む

目の前には分厚い鉄の壁

「ダァ————！！！！」

右腕を鉄の壁へ叩きつけ、その分厚い壁はいとも簡単に吹き飛び大穴を開ける

すると警報が鳴り響き、無数の犯罪者として登録されている輩が姿を現す

律儀に戦車まで用意してんのかよ

でもなあ！

「こんなモンで、行く道引いてられるかァ————！！！！」

俺は戦車へ向かって突進する

「撃滅のォオオオ！！」

のこりの2枚から、もう1枚の羽が砕け、先程よりも膨大な光が噴射される

「セカンド・ブリットォ——！！！」

拳が戦車の装甲を突き破り、内面機関を破壊する

戦車から数人の輩が逃げ出し、俺が戦車から離れると同時に戦車が爆発する

「はっ、この俺を止めたきゃ親父か劉鳳に頼むんだな！」
逃げ惑う犯罪者たち

既に本体が鎮圧を終える頃だろう

そう思い、振り返った俺の前に『ソイツ』が現れた

黒い右腕と白い左腕を持ち、頭部から炎のような物を滾らせている

ソイツは俺を静かに見つめる

「お前・・・まさか『結晶体』か!？」

俺は驚きながらも結晶体へと近づこうとしたその瞬間。俺と結晶体を包み込むように七色の光が放たれた

「う、うわああああ!!！」

プロローグ『男の夢』（後書き）

まるで吸い込まれるように体が引っ張られるのを最後に、俺の意識は途切れた・・・

やがて意識が回復し、目を開けると・・・

「な、なんだ・・・これ」

燃え盛る街並みが視界に飛び込んできた

周りでは人々の悲痛な叫びが木霊し、空には見たこともない化け物が飛んでいた

一体何がどうなってるんだ！？

すると、近くの方から子供の泣き声を聞き取り、その方向を見た俺は目を見開いた

泣き叫ぶ子供の真上から化け物の物と思われる大きな破片が降り注がれようとしていた

その瞬間。俺の中で『何か』が弾けた

目にも止まらぬ速度でアルターを精製させ、拳を握り締める

「衝撃の・・・!!」

羽が砕け、緑色の光が噴射する

間に合え、間に合え!

間に合えエ————!!

「ファースト・ブリットオオ————!!」

打ち放った拳は見事、黒い破片を捉え粉々に打ち砕く

間に合った

俺は安堵の溜め息を吐く

すると遠くから何かのエンジン音とともに声が響く

「クリス!」

「おねえちゃん!」

現れたのは俺とそう変わらないだろう女の子

風と黒煙で視界が歪んでいたせいではっきりと顔は解らなかったが、
おそらくこの子供の姉だろう

視線を空へ向け、未だ街へ攻撃する化け物を睨み付ける

「妹さん、大切にしてやんな」

俺はそう言い残し、シエルブリットで上空に飛翔する

目的は知らねえが、人を傷付けるテメエらを見逃す訳には行かねえ
！！

再び拳に力を込める

「うおおおおおお！！」

そしてその瞬間。俺は目を覚ました
天井・・・もといHOLDの貨物車の中

どうやら俺は眠っていたようだ

「夢・・・だったのか？」
額に乗せてあったタオルを手に取り

右手を見つめる

夢にしては実感が大きかった・・・それにあの結晶体は一体・・・

様々な疑問が脳内を駆け巡る
ふるふると考えるのを中断し、立ち上がる

一体あれは何だったのだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873r/>

ストライクウィッチーズ ～太陽の男と少女達～

2011年3月28日06時38分発行